俳句同好会

世話人　星野紫杏

俳句同好会も発足以来回を重ねて第百回を開催することができました。毎回御指導を戴いています久保白楊さんと、御参加の皆様に厚く御礼申し上げます。互選による選句の結果二票以上獲得を入選とし、兼題句と吟行句に分けて報告させて戴きます。

第九十四回　平成十二年一月二十六日(水)

兼題　『冬至』『年末・年始』に関わりのある物事。

句座　西洞院四条下ル東側、光悦ビル地階

割烹『家紋』にて

兼題句

菊日和　大臣表彰　以下同文　紫杏

老友の　賀状は遍路　宿からや　紫杏

光悦は　ビルの名前や　初句会　一義

初鶏や　まだ閻篝(かがり)　薪を足せ　白楊

底冷えや　玄関の靴　並べ替へ　治吉

痩せもせず　太りもせずに　去年今年　紫杏

酔いさます　七種粥の　うす緑　一義

踏む閻の　砂利みな無言　初詣　白楊

臘八や　雲低くして　荒模様　治吉

掃き始めは　注連飾り穂の　こぼれ籾　白楊

お煮染は　豆に始まり　年用意　信子

晩年の　いかなるが幸　冬至風呂　一義

二人連れ　交す言葉や　息白し　治吉

煮凝りや　今宵一人の　温め酒　陵南

ドスと落ち　もどるしじまや　雪の郷　夏至

第九十五回　平成十二年二月二十四日(木)

兼題　『薄氷(うすらひ)』『節分』『水菜(みずな)』『公魚(わかさぎ)』『梅』と当季雑詠

句座　おでん茶屋『京と味』

兼題句

御手洗の　薄氷割りて　嗽ぐ　景流

薄氷の　短き命　踏みにけり　治吉

渉り石　ゆらぎ薄氷　はなれけり　白楊

ひこばえの　残れる峡田　薄氷ぬ　景流

店上段　五束ならびし　京水菜　陵南

柊も　持ってゆきやれと鰯売　白楊

老梅の　くねりし幹や　齢百か　一義

薄氷や　芝と会話を　交はしけり　紫杏

節分会　咳止め飴の　出店あり　陵南

霜の朝　リハビリすれど　汗ばまず　尚信

薄氷に　雀のあゆみ　近づけり　一義

鯨コロ　得て決まりけり　水菜鍋　白楊

さざ波を　集めて公魚(わかさぎ)　いずち行く　一義

閑林に　一幹の梅　ほころびぬ　景流

ゆりかもめ　翔び立ち鷺は　動かざる　紫杏

第九十六回　平成十二年四月一日(土)

兼題　『雛』『鳥かへる』『菜の花』と当季雑詠

吟行　『修学院離宮』

句座　『京と味』

兼題句

黄砂降る　鴨川沿の　まよひ鳥　治吉

菜の花や　城跡の碑を　囲みおり　陵南

引鴨に　近江の水は　さみしけれ　恕

抱きあひし　ま、瀬を落つる　流し雛　白楊

残照を　受けて一文字　鳥帰る　一義
わんど舟　舫棹立て　鳥雲に　白楊
駅弁に　菜の花漬けの　添えてあり　陵南
終点に　降りてその先　春の海　紫杏
春泥に　塗れし仔犬　道塞ぐ　景流
初孫に　ひな選びする　楽しさよ　みつへ
子は無くも　雛の箱解く　時となる　紫杏
飾りつつ　雛の間妻の　一人言　一義
簪を　菜花に替えし　舞子かな　陵南
酒蔵の　白壁に映ゆ　菜花かな　恕
留鳥の　四温の池に　浮寝せる　景流
我れ病みし　荒れたる庭にも　春の花　尚信
舟泊り　舟水漬かせて　風寒し　白楊
茶を黒に　髪染め替えて　就職す　紫杏
待ちわびし　紅引き柳　芽ぶきけり　景流

吟行句

花なくて　修学の宮居　春の風　尚信
池の面の　比叡をゆらせて　東風わたる　一義
花菱の　すかしの間に　春の風　陵南
隣雲亭　京の巷の　遠霞　白楊

第九十七回　平成十二年五月十日（水）

兼題　『白百合』『鯖』『筍』と当季雑詠
吟行　岩倉『実相院』
句座　『京と味』

瓜坊に　似たる筍　くゝられし　紫杏
筍の皮　剥ぐ妻の居て　応えざる　景流
長旅の　わがもどり待つ　豆御飯　みつへ
白百合を　嬰抱くごとく　かゝえ来る　紫杏
筍皮の　産毛光れり　朝の薮　一義
雨にぬれ　八重花肖の重げなる　陵南
椿の芽の　そっと置かれし　朝の市　恕
落人の　家を囲みし　花空木　景流
灯台の　小さき庭の　白き百合　尚信
春の川　沢蟹一つ　動かざる　白楊
神官の　袖に吹き込む　風薫る　紫杏
脂粉の香　漏るゝ日傘に　越されけり　景流

吟行句

門跡の　お居間に緑風　通ひけり　白楊
野も山も　囀り満てり　陽の光　景流
岩倉は　卯の花籬　藁屋門　白楊
実相院　バス終点の　若葉風　陵南
緑風を　青竹結界　防げず　白楊
緑陰に　明治の匂ひ　隣雲軒　陵南

第九十八回　平成十二年六月二十一日（水）

兼題　『梅雨』『蛙』『鮎』『杜若』と当季雑詠
吟行　太秦『廣隆寺』
句座　『京と味』

風鈴を　吊せば梅雨の　風の音　恕
店頭に　人だかりして　鮎簀　治吉
病む妻の　何を夢見る　夏の月　治吉
夏草の　平城京跡　礎石列　紫杏
柴漬を　揚げゆく梅雨の　重さかな　白楊
青風　宮の大樹は　動かざる　陵南
雨蛙　這い上りたる　無縁墓　陵南
夏の川　星を流して　水浴す　恕

吟行句

金網に　梅雨こもりゐる　仁王かな　白楊
すが漏りの　山門千社札　滲みて　白楊
雨の輪に　あめんぼの輪の　重なりぬ　白楊
五月雨る、　揃の前だれ　六地蔵　景流
梅雨湿り　届かぬ菩薩　半跏像　紫杏

第九十九回　平成十二年十月十一日（水）

兼題　八月『片陰』『山開』『団扇』
十月『萩』『葡萄』『月』『展覧会』

句座　おでん茶屋『京と味』

兼題句

雲海の　上に月ある　飛行かな　白楊
廃屋の　籬をこえて　乱れ萩　一義
花泥棒　二度咲き桜　床に活け　治吉
片陰の　石に籬置く　大原女　白楊
祝詞よむ　宮司の狩衣　鼻の汗　紫杏
念を押す　団扇畳を　押へけり　白楊
猫が貌　そっと出しけり　こぼれ萩　景流
白皙の　老師の話　古団扇　陵南
覚えなき　我が身にまとふ　秋の蝿　紫杏
月天心　一途の日々を　思ひけり　一義
補聴器に　我が鼓動知り　秋深む　治吉
通夜の門　気配り籠に　蛍二つ　紫杏
一番の　席はゆずらず　萩繚乱　一義
片陰に　キャンパス立てて　豆画伯　陵南

第百回　平成十二年十一月八日(水)

兼題　『菊』『大根』『神楽』『紅葉』『霜』と
当季雑詠

吟行　宝塚市『清荒神参拝』
句座　宝塚市『静山荘』

兼題句

菊一輪　前だれあせし　石佛　一義
眼底に　紅葉焼き付け　旅終る　景流
習ひ巫女　神楽稽古や　神の留守　白楊
霜融けて　動き始めし　雀かな　白楊
金木犀　こぼれ敷きたる　雨後の朝　景流
干支作り　巳の舌の朱を　仕上げとす　白楊
丹波路の　軒深うして　大根干す　景流
一箸は　ほしき銘酒に　菊膾　白楊
碁仇の　菊見に来しと　あがり込み　一義
秋佛事　一族集い　鉦の音　治吉
野佛の　添竹の菊　香して　治吉
コスモスに　明け渡したる　休耕田　紫杏
祥月に　僧を迎えて　富有柿　陵南
「以の外」と　いう菊もあり　菊くらべ　一義

吟行句

参道の　店の切れ目に　木の実降る　紫杏
木の実落つ　参道薬種を　ひさぐ店　景流
せゝらぎの　音に包まる　秋の句座　紫杏

俳句同好会参加者

大和電設工業(株)　栩谷　四郎
(株)デリブ　林　治吉
光星電工(株)　久保　白楊
(株)オリヂナル電設　石崎　陵南
(株)トーエネック　新谷　景流
宮本電気工事(株)　宮本みつへ
日本システム工業(株)　三井喜代治
洛南電気工業(株)　原田　恕
堀電気工事(株)　堀　信子
川鉄電設(株)　下里　尚信
(株)トモエ屋　星野　紫杏
ゲスト参加
職別国保　三木　一義
元京都市住宅局　野坂　夏至

俳句同好会

世話人　星野紫杏

（社）京都電業協会の俳句同好会も発足して以来回を重ねて、第百九回を開催することができました。メンバーも発足時は当協会会長、副会長、理事、会員会社役員・管理職等々であったものが、今では会員会社役員・管理職は六人で、残りの参加者はリタイヤしたＯＢばかりになりました。お互いにぼけ防止のため頑張っています。

第百一回　平成十二年十二月二十二日（金）

兼題　『顔見世』『粕汁』『枯草』『雀』と当季雑詠とし、吟行は取り止めました。

句座　『京新山』（新橋通川端東入ル）にて

兼題句

顔見世の　まねき阿国を　見おろせる　白楊
枯草と　枯葉まとめて　焼かれけり　紫杏
見栄もなく　力もつきて　枯むぐら　一義
流れ行く　紅葉の速し　追へもせず　恕
老斑（しみ）の手に　ぬくもり伝う　粕汁碗　一義
宇治川の　荒瀬に枯葉　のまれけり　陵南
寒雀　とんで行きたる　丘の墓地　陵南
草枯れて　参道廣き　大山寺　尚信
寒雀　虚空に残し　日の落つる　白楊
妻伏して　粕汁つべたき　夕げかな　治吉
粕汁に　酔ひて寝息の　おぼこかな　陵南
霜の朝　土をついばむ　雀かな　治吉
草枯れて　近道一つ　増えにけり　一義
坐して見る　石庭に降る　もみじかな　恕
粕汁や　海山のもの　存分に　陵南
枯草の　中に冬草　青々と　治吉
草枯れの　果の砂山　雀鳴く　白楊
短かき日　短かき未来　年用意　紫杏

第百二回　平成十三年一月十七日（水）

兼題　『年末』『年始』とそれに関係した事柄と当季雑詠

吟行　頂法寺『六角堂』山内

句座　おでん茶屋『京と味』にて

兼題句

とうたらり　初能翁は　まだ不動　白楊
物干の　シャツが手まねく　冬日和　尚信
灯したる　まゝ暮にけり　雪起し　白楊
年酒を　差し出す巫女の　茶髪かな　景流
懐手の　まゝに挨拶　出来る仲　紫杏
初鴉　一声響き　杜明くる　景流
新年に　亡き人を消す　住所録　陵南
餅開く　軍手のまゝに　執る受話器　紫杏
初春を　洗ひ上げたる　夜半の雨　陵南
観覧車　空回りして　年の暮　陵南
活け貝が　舌出す昼の　初市場　紫杏
妻伏して　七種粥の　調はず　治吉
初詣　茶髪が手を引く　茶髪の児　紫杏

吟行句

小雪の舞ふ中を全員『六角堂』に揃いましたが、吟行句で二票以上選に入った句はありませんでした。

第百三回　平成十三年二月二十一日(水)

兼題　『雪』『梅』『鶯』と当季雑詠
吟行　小野『随心院』山内
句座　割烹『魚善』にて

兼題句

とっぷりと　昏れし雪野の　果の灯よ　白楊
只歩く　だけて楽しき　冬日和　紫杏
山椒の　とげとげしきに　風花す　景流
坪庭の　寒梅蔵の　網戸越し　白楊
初午や　小蛇もありて　飴細工　陵南
まだら雲　愛宕あたりは　雪ならむ　治吉
凍雲に　昂煌き　風渡る　景流
雷に　冬の半島　浮上る　紫杏
雪晴れや　大河の蛇行　一筆に　白楊
川面には　魚影みえねど　春隣　陵南
凍てし手の　神将空を　つかみける　紫杏
春日差し　ついばむ鳩の　紅き足　景流
鵯来り　南天さわに　こぼしけり　景流

庭師去って　縁に冬日の　とどきけり　紫杏

吟行句

随心院　蕾のまゝの　梅見かな　陵南
少将の　百夜の果てか　枝垂梅　一義
梅固し　小町の井戸に　映らざる　白楊

第百四回　平成十三年四月五日(木)

兼題　『花』『霞』『蝌蚪』
吟行　新橋から白川ぞいの花見
句座　『京新山』にて

兼題句

昼時鐘　独り安居の　春障子　景流
花びらの　つきし足袋脱ぐ　疲れかな　白楊
夕東風や　幟はためく　分譲地　景流
雪やなぎ　風にまかせし　波となる　恕
必ずや　牛蛙の子　蝌蚪太し　白楊
春耕や　四すじの畝は　畦なりに　紫杏
朝霞　大阪城の　遠く見ゆ　陵南
うごめきて　水濁しけり　蝌蚪生る　景流
故障して　五年目の春　鳩時計　紫杏
わずらいに　危き歩み　花づたい　尚信
花更けて　篝消しゆく　手桶かな　白楊
名刹は　物音もなし　花曇り　一義
春遠野　煙二すじ　立昇る　景流
夕霞む　湖に舟消え　島灯る　白楊
こも外す　幹にしみるや　陽の匂　紫杏

吟行句

なすありの　地蔵の花に　静ごころ　一義
花の句座　三十六峰　借景に　一義
川べりは　紅八重枝垂　青柳　紫杏

第百五回　平成十三年五月二十四日(木)

兼題　『開き』海開き、山開きなど『幟』鯉幟、武者幟など五月節句に関係のある物事と当季雑詠
吟行　『泉涌寺』山内一円
句座　パークホテル内の『マドレーヌ』にて

兼題句

粽解く　児の指先の　たどたどし　陵南
ずいずいと　落す仕舞湯　菖蒲の香　紫杏
苑急ぐ　巫女の緋袴　五月晝　景流

吟行句

涅槃会の　絵とき終えたる　堂静か　一義
清泉の　湧き出るあたり　薄暑はや　一義
墓地香煙　卯の花腐し　もよおせり　景流
青葉風　三尊佛の　男振り　一義
天井の　龍あせはて、　梅雨じめる　白楊
石晶藻　湧井屋形の　歌碑なぞる　一義

第百六回　平成十三年七月五日（木）

兼題　『水無月』『油照り』『虫』
吟行　『千本釋迦堂』山内
句座　京料理『天若』にて

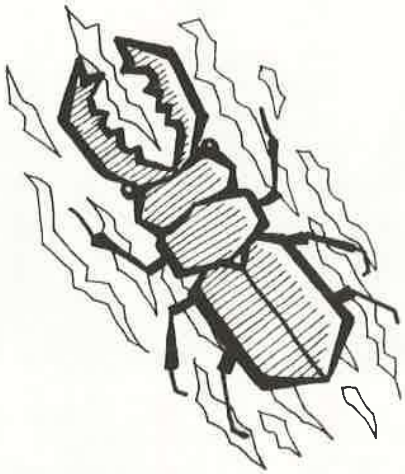
兼題句

雨意ありて　森青蛙　卵宿す　景流
試歩なれば　斑猫やさしく　振り返へる　白楊
障害の　遅き歩みに　油照り　尚信
車椅子　追いこしており　みちおしへ　恕
ヨチヨチと　鴉嘴あく　油照り　景流

水馬　香車と柱馬に　走りけり　陵南
飛火野の　客待つ人力　油照　紫杏
仏足を　尺蠖投地　礼拝す　白楊
水無月と　云う名の菓子や　夜の雨　陵南
修理成りて　緑陰に浮く　朱塗の塔　紫杏
七彩の　毛虫を踏めば　わた緑　白楊

吟行句

一病を　連れて吟行　夏の堂　紫杏
釋迦堂に　一涼を受く　善男女　一義
風涼し　千手観音　お留守なる　白楊
斗栱を見上ぐる阿亀　夏の雲　一義



第百七回　平成十三年八月二十八日（火）

兼題　『橋』『川』『河原』を詠み込んだ当季句と、当季雑詠
句座　『京新山』にて

兼題句

夕暮れて　河原へおりる　団扇づれ　白楊
夕磧　若宗匠の　夏衣　一義
歩道橋　日笠傾け　立話　紫杏
蠓を　つれて吊橋　渡りけり　白楊
来る筈の　ひと待つ汗や　阿国像　一義
増水の　川面逆撫で　余波台風　紫杏
四条橋　風に香のある　残暑かな　陵南
夕涼み　河原の石の　まだぬくし　陵南

当季雑詠

杉箸の　柾目涼しき　貴船茶屋　紫杏
夕立は　我が菜園を　降り残し　尚信
打水に　大混乱の　蟻の列　景流
夏雲や　ひときわ高し　丘の墓　陵南
シュワシュワと　熊蝉幹を　這い登る　景流
炎ける道　蟻囁きて　別れけり　景流
法師蝉　移る季節を　いそがすな　尚信

第百八回　平成十三年十月四日(木)

兼題　『夜長』『桔梗』『いなご』『敬老日』『松手入』
と当季雑詠

吟行　『御霊神社』境内
句座　おでん茶屋『京と味』にて

兼題句

暮れ残る　一処あり　白桔梗　白楊
酒蔵の　壁の白さや　秋日和　陵南
温泉の　湯船に早も　枯葉かな　尚信
一輪差し　ぴたり決まれる　花桔梗　みつへ
ヘルパーの　活けし桔梗を　見上げけり　治吉
推敲の　辞書引き句作の　夜長かな　紫杏
背伸びして　金木犀の　香をかぎぬ　尚信
雑談の　うちに本音の　出る夜長　紫杏
天高し　雲をはべらす　大比叡　陵南
棋譜を手に　独り石置く　夜長かな　一義
癒えし友　戻り賑わふ　秋の句座　陵南
松手入　作務衣の庭師　女性なる　みつへ
母の手を　引きて墓参に　時雨けり　白楊
水蹴って　蝗たちまち　流さるゝ

吟行句

剥落の　秋思におはす　矢大臣　白楊
秋の蚊を　奉拝拍手に　叩きけり　白楊
剥落の　歌仙絵馬堂　秋時雨　白楊
俳聖の　一碑ぬれゆく　露時雨　一義

第百九回　平成十三年十一月二十九日(木)

兼題　当季雑詠
吟行　長岡京市『西山粟生　光明寺』
句座　光明寺山内『いっぷく亭』にて

兼題句

晩鐘の　厨にとどき　茸飯　景流
習作に　残る墨の香　秋寒し　治吉
エンジンを　止めて挨拶　稲刈機　紫杏
理髪椅子　くるり廻れば　菊大輪　紫杏
傘乾すに　庭狭くして　みゝず鳴く　景流
物忘れ　日毎にひどし　紅葉冷え　陵南
秋深し　面壁独居　閑と静　治吉
身を反らし　手を広げても　秋の空　尚信
照る紅葉　ほしいまゝなる　送電線　紫杏

吟行句

光明寺　走り根にそい　散りもみじ　尚信
浄土門　照る山紅葉　七色に　みつへ
緋の老師　紅葉の磴を　本堂へ　白楊
落葉踏む　坂のしめりや　薬医門　一義
薬医門　くゞれば一入(しお)　紅葉濃く　みつへ
くゞり行く　照葉に染むる　勅使門　白楊
黄落と　乱をくゞりし　古柏槇(こびゃくしん)　陵南
紅葉の　落葉集まる　風溜り　尚信
きはだちて　色変へぬ樹や　紅葉寺　白楊

俳句同好会参加者

大和電設工業(株)　栩谷　四郎
(株)デリブ　林　治吉
光星電工(株)　久保　白楊
宮本電気工事(株)　宮本みつへ
(株)オリヂナル電設　石崎　陵南
(株)トーエネック　新谷　景流
日本システム工業(株)　三井喜代治
洛南電気工業(株)　原田　恕
(株)ホリテック　堀　信子
(株)トモエ屋　星野　紫杏
川鉄電設(株)　下里　尚信

ゲスト参加
職別国保　三木　一義

俳句同好会

世話人　石崎陵南

協会の俳句同好会は昭和六十一年九月二十七日に第一回を開催して以来、今年で十六年目を迎え回を重ねて百十回を超え、参加者も若干入替りましたが、老骨に鞭打ってボケ防止を兼ねて皆で努力を続けて参り度いと考えています。初心者を含め入会をお待ちします。

第百十回　平成十四年一月二十三日（水）

兼題　『年末』『年始に関係ある物事』と当季雑詠

吟行　『知恩院三門』釈迦牟尼佛参拝

句座　レストラン『三十六峰』

兼題句

初弘法　馬揃へせる　飴細工　陵南
辻社　一夜の転生　瑞気満つ　一義
着ぶくれに　あふれむばかり　脱衣籠　紫杏
老木の　若枝に咲く　梅一輪　治吉
知らざりし　訃の返信の　四日かな　白陽
去年の字は　「戦」の一字　清水寺　陵南
急がざる　余生初湯に　浸りおり　一義
力瘤　初場所わかす　猫だまし　尚信
書初は　反古ばかりにて　定まらず　治吉
御幣より　炎の上る　とんどかな　尚信

吟行句

三門も　寒風避くる　術もなく　白陽
磴つづく　大山門の　冬薔　一義
寒風に　片肌ぬいだ　羅漢さん　尚信
三門の　裸羅漢に　風寒し　白陽
御所見張る　三門寒き　華頂山　陵南

第百十一回　平成十四年三月十三日（水）

兼題　『春寒む』『水温む』『蜆』『盆梅』と当季雑詠

吟行　『西陣織会館』『安部晴明神社』『一条戻り橋』

句座　『一條殿』上京区堀川一条上ル西側

兼題句

盆梅展　甲論乙駁　市長賞　一義
春隣　まだ思惟仏は　目をつむりて　白陽
蜆汁　箸未練気に　実をはさむ　白陽
塀越しに　沈丁の香の　匂ひけり　下里
大根の　抜き跡一列　春の畝　紫杏
山の宿　お湯わり焼酎　蕗の薹　陵南
盆梅や　一枝の影も　欺むかす　一義
金婚や　可も不可もなき　春炬達　紫杏
凍ゆるむ　鍬に切れたる　畝光る　白陽
春寒し　露地裏暮六つ　縄のれん　一義

吟行句

人なべて　陰陽かかえ　春愁う　一義
陰陽師　えにしの橋の　柳かな　一義
さすが京　路地毎供華の　春めきぬ　白陽
偲ぶもの　なかれど芽ぶく　戻り橋　一義
春風に　ジンタの乗りて　着物ショー　紫杏

第百十二回　平成十四年四月十八日（木）

兼題　『桜（花）』『春休み』『子猫』『花粉症』と当季雑詠

吟行　『船岡山』『建勲神社』

句座　『一條殿』

兼題句

うぐいすの　様になりたる　今朝の声　下里
大太鼓　大神山の　覚め給ふ　紫杏
楠落葉　気兼して焼く　庭の隅　紫杏
孫くるや　碁盤持ち出す　春休み　陵南
べた凪の　湖に春風　わたる道　紫杏
銭湯に　喧騒続く　春休み　下里
托鉢の　草鞋をぬらす　春の雨　紫杏
風に舞ふ　花あり水に　舞ふ花も　宮本

吟行句

石くれの　彫り仏かな　山つつじ　白陽
祭神は　信長公なり　春惜む　陵南
捨て子猫　ならぬと貼紙　山門に　白陽
野仏の　コーヒー缶の　春の供華　白陽
東風　桜芯降る　建勲社　下里

第百十三回　平成十四年六月七日（金）

兼題　『初夏』『金魚』『新緑』『更衣』
吟行　『須磨離宮』『須磨寺』
句座　『須磨離宮レストラン』

兼題句

あしたばの　染し色あい　初夏匂う　宮本
琉金の　風格にして　しなやかに　一義
気にいりを　今年も出して　衣がえ　下里
おこしやす　衣がえした　部屋係　陵南
捨てがたし　古きデザイン　衣がえ　宮本
夏来る　阪神一位　つづきけり　陵南
行く先の　思案きまりて　衣更　一義
夜店より　袋に一尾　くず金魚　陵南

吟行句

菖蒲池　めだかの列の　見えかくれ　紫杏
花菖蒲　揺れの揃はぬ　首細き　白陽
須磨離宮　卯浪まぶしき　瀬戸内に　一義
芭蕉と云ふ　名や須磨の　花菖蒲　陵南
噴水の　間断ありて　池面映ゆ　一義
水平線　抜く噴水の　穂先かな　白陽
衣がえ　吟行遠出　須磨離宮　陵南

第百十四回　平成十四年八月六日（火）

兼題　『浴衣』『団扇』『鬼灯』『盛夏』『須磨寺』
　　と当季雑詠
吟行　今回は句座のみ
句座　『京新山』

兼題句

鬼灯で　提灯競う　仏かな　下里
腰抜けの　団扇の遺墨　捨て難き　白陽
炎天へ　はげまされつつ　でかけたり　陵南
ほおずきを　口もと小さく　鳴らすなり　宮本
水打てば　網戸にそよぐ　風あらた　紫杏
須磨寺へ　風がつれくる　夏の蝶　一義
堂守の　不在を告げる　せみしぐれ　下里
碁仇も　のびてござるか　夏盛り　一義
ななふしや　風強けれど　動かざり　陵南
糊浴衣　板の如くに　扱はれ　白陽
玉葱の　曲る新芽や　籠の底　紫杏
須磨寺に　恋の碑もあり　夏木立　一義
マネキンは　極彩色の　浴衣つけ　紫杏

第百十五回　平成十四年九月二十六日（木）

兼題　『秋近し』『コスモス』『法師蟬』『豊年』
　　と当季雑詠
吟行　『京都府立植物園』『陶板名画の庭』
句座　植物園内『レストラン』

兼題句

余慶尽き　余殃厳しき　喜寿の秋　紫杏
豊年と　いふ辛口の　地酒うく　一義
雨やんで　コスモス向きを　揃えけり　紫杏
分譲地　今年また咲く　秋桜　陵南
かりそめを　生きて大地へ　法師蟬　一義
コスモスや　コスモス寺を　狭めけり　紫杏

吟行句

色あせし　猩猩鶏頭　つなぐ夢　下里
槍鶏頭　鶏頭の咽を　つつきいる　白陽
大芝生　ここで名月　寝てみたし　一義
裸婦像の　錆ある乳房　秋近し　白陽
葉鶏頭　猩猩赤色　振るごとし　白陽

第百十六回　平成十四年十一月十三日（水）

兼題　『晩秋』『朝露』『秋時雨』『鳥渡る』
　　『千枚漬』と当季雑詠
吟行　『枳殻邸（渉成園）』
句座　枳殻邸内『滴翠軒』

兼題句

空鋏　リズムの乗りて　松手入　紫杏
日差しある　湖わたりゆく　秋時雨　白陽
駅出口　小走りの人　秋時雨　陵南
花鋏　まづ朝露に　濡れにけり　白陽
初物の　千枚漬は　古伊万里に　白陽
風渡る　宇治川中洲　花芒　陵南
病妻三年　空呼するか　秋の宵　治吉
検診の　結果良好　秋日和　陵南
菊の供花　香の満ちて　良夜かな　治吉
晩秋や　さびしき話題　目をそらす　下里

吟行句

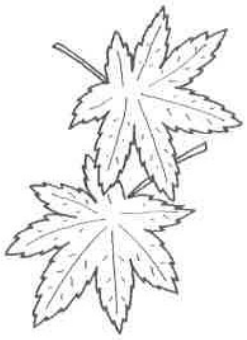
はぜの朱　ここに極まり　池めぐる　一義
日なたより　日かげに流る　浮寝鴨　紫杏
天を突く　三葉かえでの　眞紅なる　紫杏
枯蓮に　執念の鷺　たたずめり　一義
紅葉も　寄りて渡るや　回棹廊　下里
みなも切り　鴨枳殻池に　到着す　紫杏
櫨紅葉　枯白しんの　そそり立つ　白陽
抜きん出て　粧ふ一樹　枳殻邸　白陽

第百十七回　平成十四年十二月十八日（水）

兼題　『雑炊』『日向ぼこ』『千両（万両）（南天の実）』と当季雑詠
句座　京都伊勢丹内『西利』

兼題句

実千両　藁屋軒端の　雨雫　白楊
沽券には　縁なかりけり　日向ぼこ　白楊
指折りて　一句をえたり　日向ぼこ　一義
呼び声が　聞こえないふり　日向ぼこ　下里
南天の紅　きわまりて　遠比叡　一義
腑にしむや　予後の酒なき　牡蠣雑炊　白楊
雑炊や　燗のはしれる　手と腕と　一義
雑炊も　さいはいきかず　鍋奉行　下里
寒風に　貫王選びし　帰の字かな　陵南
賀状書く　一年振りの　きづなかな　治吉
大根かけ　赤蕪もかけ　漬け仕度　紫杏
都大路　風に芯ある　寒さかな　紫杏



俳句同好会参加者

㈱デリブ　林　治吉
㈱トモエ屋　星野　紫杏
光星電工㈱　久保　白楊
川鉄電設㈱　下里　尚信
宮本電気工事㈱　宮本みつへ
洛南電気工業㈱　原田　恕
㈱トーエネック　新谷　景流
㈱オリヂナル電設　石崎　陵南

ゲスト参加
職別国保　三木　一義

俳句同好会

世話人　石崎陵南

協会の俳句同好会は発足以来十七年目を迎え平成十五年末で百二十五回となりました。参加者は現在七名ですが、毎回京都市内やその近辺の神社、仏閣、公園に吟行し句座を開催しています。初心者を含め入会をお待ちしています。

第百十八回　平成十五年一月二十九日（水）

兼題　『去年今年』『初のつく季語』と当季雑詠
句座　『京新山』（新橋通川端東入ル）にて

兼題句

七草を　三種に省き　餅の粥　紫杏
初凧　奴鎌髭　大目玉　白楊
初手合い　鶴の巣ごもり　決まるとは　一義
書初めの　反故を紙縒りに　捻り初め　白楊
さしのべし　柄杓に淑気　滝不動　一義
大寒や　猫背の並ぶ　立ちそば屋　陵南
俤を　賀状にさぐる　友のふえ　一義
朝日浴び　水仙一輪　咲きほこり　宮本
賀状来ぬ　遠方よりの　長電話　紫杏
陽だまりの　餌に群れ来し　寒雀　宮本
初硯　墨にじめる　眞砂和紙　一義
京囲む　山々すべて　凍にけり　紫杏
初もうで　妻を見舞て　去年今年　治吉
注連飾る　足もとあやし　脚立かな　陵南
山茶花の　散り重なりて　苔の上　治吉
初風呂の　知らぬ人にも　御慶かな　下里
塗り箸を　割箸に替え　なまこかな　紫杏
救急車　去年より今年へ　走りけり　白楊

第百十九回　平成十五年三月十四日（金）

兼題　『梅』『蜆』『猫』『寒明』と当季雑詠
吟行　車折神社
句座　『京と味』烏丸御池角（リクルートビル内）

兼題句

置き去りの　手袋ベンチ　春隣　陵南
双鶴の　舞う絵襖や　盆梅展　一義
寒明や　賀茂の河原に　ならぶ竿　陵南
好き嫌い　なくて長生き　蜆汁　陵南
舞う小雪　見得切る仁王　柵の内　紫杏
花びらが　舞とどまりぬ　春一番　下里

吟行句

芸能の　宮に紅白　枝垂梅　一義
朱門わき　白梅紅梅　しだれ咲き　陵南

第百二十回　平成十五年四月十一日（金）

兼題　『花（桜）』と当季雑詠
吟行　原谷苑にて花見
句座　『しょうざん』（北区衣笠鏡石）

兼題句

花筏　解きてよどみに　うづ巻ける　下里
三年すぎ　植えし桜の　咲きにけり　陵南
桜咲く　何時もの土堤は　華やげる　陵南
古戦場　ねむる仏も　花見かな　下里

吟行句

雨粒の　しだれ花より　今落つる　白楊
傘からむ　しだれ桜の　小雨かな　下里
仁和寺へ　花のトンネル　一筋に　一義
開拓を　しのぶ天領　花静か　一義
一憂す　開花予想に　雨降ると　陵南
隠れ里と　云はるも花に　顕るる　白楊
満開の　花を離るる　風もあり　紫杏
一献も　莫蓙も　ご法度　花の下　一義
原谷へ　忍び返るや　花の雨　一義

第百二十一回　平成十五年五月二十三日（金）

兼題　『端午』と子供の日関係、『筍』『鯖』と当季雑詠

吟行　長楽寺

句座　『かに家』（八坂神社前）

兼題句

初せみの　はや途絶えけり　耳すます　宮本

沸きすぎの　気配菖蒲湯　匂ひけり　白楊

筍の　身のたけかくす　衣かな　下里

下手くそに　掘られ筍　盗まるる　白楊

職引きて　昼酒となる　味噌煮鯖　白楊

高層の　風に矢車　目を弾じき　一義

鯖光る　片身はしめる　余は味噌煮　白楊

菖蒲湯に　疲れをいやす　年になり　宮本

通い路の　若竹音し　皮を脱ぎ　一義

吟行句

読めぬ句碑　たどる薄暑の　寺巡り　白楊

羅漢の眼　三十二個に　若葉かな　紫杏

新緑も　香も匂うや　長楽寺　下里

うすら汗　登りつめたる　長楽寺　紫杏

第百二十二回　平成十五年六月二十六日（木）

兼題　『梅雨』『簾』『鰻』『鈴蘭』と当季雑詠

吟行　円徳院（高台寺の近く）

句座　『かに家』

兼題句

舌の上　新茶ころがし　納得す　紫杏

一品は　鰻蒲やき　湖の宿　陵南

烈しさは　一山走る　梅雨の雷　一義

雨つづき　巻き上げられし　青簾　下里

紫陽花の　しずく光りし　こもれ陽に　宮本

風受けて　ひとりよがりの　簾かな　一義

梅雨寒や　配達人は　ぬれそぼつ　下里

梅雨深く　時間長者の　一日かな　一義

鈴蘭の　香に誘われて　近づきぬ　宮本

吟行句

格子戸の　石塀小路も　入梅かな　一義

梅雨晴間　庭筋乱れず　ねねの寺　白楊

雲低し　枯山水を　翔ぶ燕　紫杏

梅雨の苔　地泉の水を　模しいたり　白楊

梅雨晴れに　開け放ちけり　大方丈　白楊

桐紋に　古代の影や　梅雨ぐもる　一義

第百二十三回　平成十五年八月六日（水）

兼題　『明易い』『朝顔』『鱧』『夜店』と当季雑詠

句座　『京新山』

兼題句

待ち合はす　友を案内し　鱧料理　陵南

孫つれて　我も忘れて　金魚釣り　宮本

明け易の　夢のあとさき　みなうつつ　白楊

明易や　宇治の河原の　竿の列　陵南

大声の　店に集る　夜店かな　陵南

裂いて見て　蚊帳吊草の　香あり　紫杏

長雨や　夜店中止の　重ねばり　下里

幼等の　うごかず夜店　ひよこかな　白楊

遠来の　友に地酒と　鱧落し　陵南

朝顔や　端から数へ　つつ歩む　下里

古道具　夜店客なし　主さへ　白楊

あけ放つ　窓をはみ出す　雲の峰　宮本

門衛の　あくび大きく　明け易し　白楊

朝顔の　蔓や宇宙を　さぐりぬる　白楊

久方の　墓参夏草　せまき道　紫杏

夏の雨　犬も犬用　合羽着し　紫杏

第百二十四回　平成十五年九月二十四日（水）

兼題　『建物又はその一部』と当季雑詠
吟行　白沙村荘の庭と橋本関雪記念館
句座　和風料理『はしもと』

兼題句

秋寒や　折り畳まれし　揚床几　白楊
カーテンに　秋風を生む　窓開く　宮本
古寺の　長き土塀の　残暑かな　陵南
寒さ来て　天井はりつく　夏の虫　下里
今朝早く　風鈴軒より　はずしけり　紫杏
野仏に　水引草の　供華淋し　白楊
鎖樋　曲りて秋雨　添ばず落つ　白楊
アトリエも　そぞろ秋気や　大玻璃戸　一義
女郎花　畳廊下の　向小側　紫杏
紅白の　萩忘枠に　収まらず　陵南
鬼瓦　入道雲を　睨みおり　白楊
五平餅　囲炉裏に挿して　人居らず

吟行句

秋空の　十三重塔の　影池に　宮本
四阿の　屋根より高き　百日紅　陵南
瘤に瘤　重ねて老いぬ　百日紅　白楊
村荘の　石も息する　秋の雨　陵南
如意獄を　背に磨崖仏　秋に入る　一義

第百二十五回　平成十五年十一月十三日（水）

兼題　『夜寒む』『木の実』『草の実』『文化の日』
　　『柿』と当季雑詠
吟行　法然院（左京区鹿ヶ谷）と哲学の道
句座　和風料理『はしもと』

兼題句

細枝の　熟柿をまたず　からすかな　下里
大小の　不揃ひわびて　柿呉るる　白楊
深みある　蕎麦を味わう　峠茶屋　陵南
猫遠出　草の実つみて　帰りけり　宮本
添え花と　して床の間の　女郎花　陵南
盆栽に　柿の実一つ　なりにけり　宮本

吟行句

落葉掃く　大原女姿や　法然院　陵南
哲学の　疎水へ秋思　流しけり　白楊
余り水　したたり受くる　石蕗の花　白楊
本尊に　向き合う静寂　木の実降る　一義
行く秋や　比叡間近に　思索道　一義
秋風に　枯葉舞ひ舞ひ　法然院　宮本
京に住み　知らぬ京知る　秋吟行　陵南

俳句同好会参加者

(株)デリブ　林　治吉
光星電工(株)　久保　白楊
(株)オリヂナル電設　石崎　陵南
宮本電気工事(株)　宮本みつへ
川鉄電設(株)　下里　尚信
(株)トモエ屋　星野　紫杏

ゲスト参加
職別国保　三木　一義